

## 世界の周縁へ回帰するヨーロッパ

### Europe: the return to the periphery of the world

非ヨーロッパのレンズを通して見ると、ヨーロッパとアメリカはごう慢になって孤立も当然であり、おそらく一つの戦いには勝つことができて、歴史の戦いでは確実に敗北する道を歩んでいる。

ボアベンチュラ・デ・ソーサ・サントス  
ALAI 2022年4月14日



第一次世界大戦から100年、ヨーロッパの指導者たちは、新たな全面戦争に向かって夢遊病者のように歩み続けている。1914年のように、彼らはウクライナでの戦争は限定的で短期間で終わると考えている。1914年、ヨーロッパの首相官邸では、戦争が続くのは3週間と言われていた。しかし、実際は4年続き、2千万人以上の死者を出した。

1918年と同じように、今日でも、侵略者に徹底的な罰を与え、その国を壊し、長く屈服させることが必要だという考え方が主流である。1918年当時、敗戦国はドイツ（とオスマン帝国）であった。ドイツを完全に屈服させることは、ヨーロッパの再建、大陸と世界の恒久的な平和という点で破滅的であるとする反対意見（ジョン・メイナード・ケインズとその他数名）があった。

彼らの警告は聞き入れられず、21年後、ヨーロッパは再び戦争に突入した。そして5年後、7000万人以上の死者を出す破壊の時代がやってきた。歴史は繰り返さないし、何かを教えてくれるわけでもないが、類似点と相違点を明らかにし、浮き彫りにしてくれる。2つの例を挙げよう。

1914年まで、ヨーロッパは100年間、比較的平和であった。この間、多くの戦争があったが、それは限定的で短期的なものであった。この平和の秘密は、ウィーン会議（1814～1815年）にある。フランス革命が引き起こし、ナポレオン戦争によってさらに悪化した変動、混乱、戦争のサイクルに終止符を打つ

目的で開催され、ナポレオンがワーテルローで敗北する 9 日前に条約に調印した。会議全体は保守的な勢力によって支配され、その後の時代は「(ヨーロッパの旧秩序の) 復古」と呼ばれるようになった。

この時、ウィーンでの会議が思い出されるのは、そのもう一つの側面と関係がある。この会議の議長は、オーストリアの大政治家メッテルニヒである。メッテルニヒの最大の関心事は、ヨーロッパのすべての国、勝者と敗者を結びつけて、恒久的な平和を確保することであった。敗戦国であるフランスがその結果(領土の損失)を被ることは明らかであったが、他のすべての国(オーストリア、イギリス、ロシア、プロイセン)と条約に署名し、ヨーロッパ全体の恒久平和を確保するために、すべての調印国に条件が課されたのであった。そして、それが実現した。

現在の状況と比較すると、多くの違いがある。主要な違いは、同じヨーロッパで起こっているにもかかわらず、戦争当事者がヨーロッパと非ヨーロッパの国(それぞれロシアとアメリカ)であることである。この紛争は、第三国であるウクライナを「犠牲の国」として利用して、アメリカとロシアがヨーロッパという地域をもはるかに超えた地政学的目標を達成する代理戦争の様相を示している。実際、ロシアがウクライナと戦争しているのは、NATO という組織であり、そのヨーロッパの連合軍最高司令官は "伝統的にアメリカの司令官" である。

NATO は組織として、特に第一次冷戦の終わりから、アメリカの地政学的利益に奉仕してきた。かつてロシアは、他の地政学的文脈において、民族自決の確固たる擁護者であったが、自国の安全保障上の利益を平和的手段で認めさせることに失敗すると、露骨な帝国懐古主義に駆られて、今や違法にこの同じ原則を犠牲にしている。

アメリカはといえば、第一次冷戦の終結後、ロシアの敗北をさらに深めようと努めてきた。しかしこの敗北は、実は相手の優位性によってもたらされたというよりも、おそらく自業自得というべきものであった。

一時期、ワシントンでは「ロシアと平和のためのパートナーシップを結ぶべき」とする主張を、「ソ連圏(から離れた諸国の)安全を確保するため NATO を拡大すべき」とする論者の間で外交論争が繰り広げられた。クリントン大統領のもとでは、後者の方針が優勢だった。(ロシアと)理由は違っても、アメリカもウクライナを「犠牲の国」と見ているのだ。このように考えると、ウクライナ戦

争の最終目標は、ロシアに無条件の敗北を与えることであり、できればモスクワの政権交代につなげることである。戦争がいつまで続くは、その目標次第ということになる。

英国首相が「今、ロシアがどういう立場であろうと、対露制裁は続ける」と発言して憚らないとき、ロシアに戦争終結をうながすインセンティブはどこにあるのだろうか。プーチンが追放されればいいのか（1815年のナポレオンのように）、それとも中国の膨張を食い止めるためにロシアの追放が必要なのだろうか。1918年のドイツ屈服でも政権交代があったが、結局はヒトラーにつながり、さらに悲惨な戦争になった。

ゼレンスキー大統領の政治的偉大さは、侵略者から最後の血の一滴まで国を守る勇敢な愛国者としてか、あるいは多くの罪のない死が差し迫り、軍事力の非対称性に直面しながら、尊厳ある平和を確保するために同盟国の支援を得て厳しい交渉に成功した愛国者のどちらかと解釈できるだろう。いま前者の解釈が一般的になっているのは、ゼレンスキー大統領の個人的な好みとはあまり関係がないだろう。

過去との相違点と類似点についての二つ目の例は、ヨーロッパの地政学的な位置づけである。20世紀の2つの世界大戦の間、ヨーロッパは自らが自称するように世界の中心であった。だから我々はこれらの戦争を世界大戦と呼ぶ。だが実は、ヨーロッパの軍隊のうち約400万人はアフリカやアジアの軍隊だったのであり、何千人もの非ヨーロッパ人が死んで、遠く離れた植民地の住民たちが、自分たちには関係のない戦争に巻き込まれて犠牲になり、代償を払った。しかし、今やヨーロッパは世界の片隅に過ぎず、ウクライナの戦争はそれをさらに小さくしてしまうだろう。何世紀もの間、ヨーロッパはユーラシア大陸の最果てであり、中国からイベリア半島に至る広大な大地で、知識、生産物、科学技術、文化の交換が行われてきた。16世紀の科学革命から19世紀の産業革命に至るまで、後にヨーロッパの優秀さとされるものの多くは、こうした何世紀にもわたる交流なしには理解できないし、不可能であっただろう。

ウクライナでの戦争は、特にそれが長引けば、ヨーロッパの歴史的大国の一つであるロシアを切り捨てるだけでなく、世界の他の国々、特に中国から孤立させる危険性がある。世界は、欧州のレンズを通して見るよりもはるかに大きい。

この欧州のレンズを通して見ると、ヨーロッパ人は大きなパートナーにかつてなく強固に親密になっていると感じ、歴史の正しい側にたっていると確信する。地球全体が「自由主義秩序」の世界によって運営されており、世界はようやく、中国の主要パートナーであるロシアを破壊した後、近いうちに出かけて行って中国を征服するか、少なくとも無力化するだけの力があると感じている。

しかし一方、ヨーロッパ以外のレンズを通して見ると、ヨーロッパとアメリカはごう慢になって孤立同然となっており、おそらく一つの戦には勝つことができても、歴史の戦争では確実に敗北する途上にある。

世界人口の半分以上が、対口制裁に参加しないことを決めた国々に住んでいる。ウクライナへの不法な侵攻に（当然）反対票を投じた国連加盟国の多くは、ロシアではなく、アメリカ、イギリス、フランス、イスラエルに侵攻された歴史的な経験に基づいて、そのように投票した。彼らの決断は、無知にではなく、用心深さに導かれてなされたのだ。

SWIFT という金融システムは政治的干渉から経済取引を保護することを目的とし構築されたのに、それを構築した諸国が、政治的な理由である国をシステムから排除することになるなんて、どうして信用できるのだろうか？アフガニスタン、ベネズエラ、そして現在のロシアのような主権国家の財政と金準備を思いのままに力づくで没収する国を、どうして信用できるだろうか？

表現の自由を神聖な普遍的価値として喧伝しながら、それが露呈した途端、検閲に訴える国とは？民主主義を大切にしないはずの国々が、選挙で自分たちの利益に反することがあれば、平気でクーデターを起こすのだろうか。「独裁者」であるニコラス・マドゥーロが、状況が変わったからといって一夜にして貿易相手国になるような国々があるだろうか？

世界は以前とは違って、もはや無邪気な場所ではないのだ。

（以上）

筆者のポアベンチュラ・デ・ソーサ・サントスは、ポルトガルのコインブラ大学教授、米ウィスコンシン＝マジソン大学教授など歴任（本人のHPから）

【翻訳 田中靖宏】